

財団だより

第107号

2005.9

多摩川



精緻な鮎毛鉤



多摩川八景 その⑥

Photo & Text : 遠藤顕彦 (Hidehiko Endo)

御岳溪谷

多摩川上流部、惣岳、氷川、鳩ノ巣などの溪谷のつらなりの一番下流に位置する御岳溪谷は、名水百選にも入る奥多摩の絶景のひとつである。この辺り、川の水量は多く、流れも速い上に変化に富んでいて、四季折々の豊かな川の表情を楽しむことが出来る。また、川岸には約4kmの遊歩道、溪谷には数本の人道橋が架けられており、日本の明治・大正・昭和を代表する美術品を展示する「御岳美術館」、奥多摩郷土の美術・工芸品を展示する「せせらぎの里美術館」、日本画の巨匠河合玉堂ゆかりの「玉堂美術館」、「澤乃井・櫛かんざし美術館」、童謡「お山の杉の子」の歌碑などを訪ねて、木立とせせらぎの中を散策するにはうってつけの環境でもある。近頃では、人々の健康志向も手伝って、カヌーイングや溪流釣りなどのアウトドア・ライフを楽しむ場としても人気がある。また、初日の出を拝む人で賑わう御岳山頂へのケーブルカー乗り場も溪谷からはそれ程遠くない。青梅線の御獄駅または沢井駅から、いずれも徒歩数分。

Contents 目次

- 巻頭言
温暖化対策と持続可能な社会 2
- 雨水は天水、ともに生きる工夫を 3
- 「滝合小学校水辺の楽校」軌道に乗る 4
- 都指定 里山保全地域
第1号の里山：横沢入 5
- 多摩丘陵の緑の保全運動 6
- 財団からのお知らせ
助成研究募集のご案内 7

温暖化対策と持続可能な社会



環境新聞編集部
工藤 真一

今年の夏も各地で猛暑に見舞われている。熱中症で倒れる人も続出しているという。振り返れば昨年も記録的な猛暑だった。東京では真夏日が40日間も続いた。猛暑だけではない。観測史上最多の10個の台風が日本列島に上陸し、各地に甚大な被害をもたらしたことは記憶に新しい。やはり異常気象と言わざるを得ない。

世界各地でもここ数年、熱波や干ばつ、洪水などが頻発している。2003年に欧州を襲った熱波によって約3万人もの死亡者が出た。こうした現象の背景に地球温暖化が関係しているのではないかと不安に感じている方々も多いことだろう。

地球温暖化問題はその影響の及ぶ範囲や時間的な広がりから見て、人類が直面している最大の環境問題である。地球温暖化の進行によって異常気象が頻発し、その規模も大きくなると予測されており、将来世代への責任を果たすためにも、この問題に真剣に取り組んでいく必要がある。

地球温暖化を防止するための京都議定書が今年2月によく発効した。途中、アメリカが議定書から離脱するなど紆余曲折を経たが、先進国全体の温室効果ガスを1990年比で約5%削減する国際的義務が現実のものとなった。日本も多々難点があるものの政府の目標達成計画が4月に決定され、国際公約の6%削減に向け、国を挙げての取り組みが求められている。

1992年の地球サミットで採択された気候変動枠組み条約に基づき、当時、先進国は温室効果ガスの排出量を2000年までに1990年レベルへ抑えることを公約した。しかし、その後排出量の増加を抑えられず、途上国の信頼を裏切っている。そのため、法的拘束力を伴う削減目標を定めた京都議

定書が生まれた経緯がある。その削減目標の達成は地球温暖化防止の観点からはわずかな一歩に過ぎないが、途上国の信頼を回復し削減努力を促す上で、その意味は非常に大きい。

余談だが、筆者は約20年の記者経験の中でも、1997年のCOP3（気候変動枠組み条約第3回締約国会議）で京都議定書が難航の末採択された歴史的瞬間に立ち会えたことが最も印象深い。それまでの厳しい政府部内調整などの取材を振り返りながら、採択後しばらく鳴りやまなかった万雷の拍手を感動をもって聞いていた1人であった。「先進国がまず持続可能な社会のモデルを自ら示さなければならない」。多忙の中インタビューに応じてくれたCOP3のラウル・エストラーダ全体会議長の言葉が忘れられない。

「脱温暖化社会」の構築は現在、「循環型社会」とともに、政府における環境対策の大きな柱である。これらはそれぞれ「持続可能な社会」の重要な側面であることは間違いない。

2002年の地球サミットで採択されたヨハネスブルグ宣言では、「貧困削減、生産・消費形態の変更、及び経済・社会開発のための天然資源の基盤の保護・管理が持続可能な開発の全般的な目的であり、かつ、不可欠な要件であることを認める」、「人間社会を富める者と貧しい者に分断する深い溝と、先進国と開発途上国との間で絶えず拡大する格差は、世界の繁栄、安全保障及び安定に対する大きな脅威となる」とある。更に「大企業も小企業も含めた民間部門が、合法的な活動を追求するに際し、公正で持続可能な地域共同体と社会の発展に貢献する義務があることに同意する」と明記されている。

21世紀に入り、政府だけでなく、主な経済主体である企業も持続可能な発展に義務を負うことが世界の共通認識となった。今後のCSR経営では、世界の貧困削減なども重要な課題となるだろう。日本も政府、企業、そして市民とのパートナーシップを強化し、脱温暖化社会、持続可能な社会の構築に向け全力を挙げていかなければならない。

特別寄稿



雨水は天水、 ともに生きる工夫を

NPO 法人
グリーンネックレス
雨水活用部会

黒岩 哲彦

NPO グリーンネックレスには、武蔵野台地の水や緑に関心のあるグループが集まっています。この地域では、中央線の高架化が進められていますが、高架になると、降った雨が下水に捨てられてしまいそうだというところに不安を感じ、4年前から地域の水と緑のために、高架に降る雨と、「一度対話してから、大地や空にかえそう」と様々な活動を進めてきています。

このあたりは、かつては武蔵野の森に覆われ、多くの湧き水や野川が魅力的なところでした。しかし、地下水位が下がり、緑が減少し、湧き水が減り、野川の水量も減ってきたため、多くの先人たちが研究し、分析し、またこの地域の魅力を大切にする意義を語ってきました。地域に根付いたこうした後押し力は、さまざまな実践を可能にしてくれているようです。

NPO グリーンネックレスは、関連6市の市長や、伊藤滋先生、進士五十八先生、日本建築学会などとの連携を含め、さまざまなシンポジウムや検討会を開催し、社会活動として展開しています。

技術的な検討としては、高架に降る雨を使い、農工大の敷地で雨水の池を作り、それを地元で手入れして雨水を地元で愛でてから、大地や空にかえすプログラムや、商店街に雨水を自動散水するフラワーポットをちりばめる、花いっぱい商店街のプログラムなど多岐に渡って進められ、様々な研究助成もいただいています。

実践活動もさかんです。雨水タンクを数十件設置し

ようとする活動、自動散水装置で花いっぱいにする活動など、具体的です。

身近な暮らしの中では雨水の浸透枿がかなり一般的になってきました。しかし、それは誰の目にも触れることのない土木設備です。水道水よりもきれいで、地球を清めてくれる役に立っている雨ですから、もっと目に見えるように、もっと私たちの身近になるようにしたいものです。防災用水や土木設備として雨と関わるだけではなく、日常生活に関わる雨との触れ合いを私たちは望んでいるのです。せつかく環境を考えて実施する屋上緑化が、遠くから運んでくる水道水の利用量をさらに増やすようでは本末転倒です。そこで、「私たちの大好きなガーデニングには水道水を使わない」というメッセージも重要です。雨との触れ合いがお庭から始まります。

地域全体に対する改善の意識も育っています。「雨を大切にすると緑を増やせば、夏の暑さも2~3℃下げることができる」。これは雨を大切にすると良好な身近な地域を作ろうとする活動です。農工大のプログラムについては、すでに農工大、JR、東京都、小金井市等関連機関とで協議を始めています。花いっぱい商店街の活動も東京都の支援を受けて小金井の駅前でも実施されました。

雨との触れ合いは、雨水利用という利便性の概念から脱却して、楽しいと感じられるようなものが快適な身近な環境のために試みられてきています。今年からは地元の8大学と連携して「雨の学校」を開校し、講座を重ねてきています。「雨の学校」とは、市民、地域の産業・経済活動に関わる人達、地域に関わる学生、大学の先生などが集まり互いに語り合い学習する場です。これらがさらに大きな輪になってゆくことを楽しみにしています。

（「雨の学校」で教科書として、『雨の建築学』『雨の建築術』（日本建築学会編集、北斗出版）が使われています。関心のある方は、これらの本をご高覧下さい。）



「一度対話してから、
大地や空にかえそう」
を表現したイメージ図



中央線沿線のウォッチング風景

小金井駅前で実施された
花いっぱい商店街活動



多摩川に学ぶ

「滝合小学校 水辺の楽校」軌道に乗る



日野市立滝合小学校
校長 太田 由紀夫

『浅川を遊べる川に』をテーマに平成12年度以来、足掛け4年の歳月がたってしまいましたが、どうやら、開設にこぎつけることができました。申請をした当時の6年生の子ども達もはや、高校1年生となりました。

過日（平成17年3月22日）に国土交通省の関係者や日野市水路清流課の方々、地域の保護者の代表を招いて開設式を行ないました。完成したワンドを前にしたテープカットでは、子ども達の願いから開設した『水辺の楽校』にふさわしく、在校生、卒業生が一同に会し、共に今後の活用への思いを新たにしました。

水辺の楽校は国土交通省が環境意識の高揚を旨としたプロジェクトですが、環境教育の中で育った子ども達の側からの提案は、おそらく全国でも滝合小学校だけではないでしょうか。申請した子ども達が卒業した平成14年には、在校生が総合的な学習の時間の学習を始めるにあたって浅川の『水辺の楽校』について卒業生や国土交通省の方々から学ぶ会を持ちました。その後も6年生が浅川で学んだことを5年生に発表して行くシステムを教育課程に位置づけ、願いの実現に向けた取り組みを行なっています。また、卒業生や卒業生の保護者や地域の方々を加えた『水辺の楽校推進プロジェクト』を発足させ、継続的に活動を続けてきました。その成果を日野市の水辺の郷シンポジウムなどに発表してきました。

平成17年度にはワンドが建設されたのを受け、『水辺の楽校推進プロジェクト』を『滝合小水辺の楽校運営委員会』と改め、学校の校務分掌に位置づけることとしました。

ワンドという基盤が整備され、総合的な学習の時間はもちろんのこと理科や生活科の指導計画にも活かす

ことができるようになりました。さらに、ワンドに帰ってきたウグイやオイカワ、それを求めてやってくるカワセミやコサギやチュウサギの姿を写真にとる地域の人たちも現れ始めました。今後は一層の浅川の自然環境の復活を通して、学習環境ばかりでなく多くの地域人々の憩いの場となることでしょう。

『滝合小水辺の楽校運営委員会』では川の生態研修会を企画し、教員ばかりでなく地域の自然愛好家にも働きかけています。2学期にはワンド魚採り大会（もちろんリリース）を子ども達と行ない、自然復活を実感させたいと思っています。

それにしても、梅雨期や台風による増水の影響でワンドの形状が変わること（添付写真）が心配です。運営委員会では、当初の計画の完全実施をお願いすると共に変化したワンドの様子を国土交通省に報告しワンドの維持管理を依頼しています。



増水した「滝合小学校水辺の楽校」フィールド



児童による河川観察活動

多摩川散歩

都指定 里山保全地域

第1号の里山:横沢入



伊奈石の会 代表
内山 孝男

JR五日市線の武蔵増戸駅と武蔵五日市駅のほぼ中間の北側に横沢入（よこさわいり）はある。東京都は、この場所を「里山保全地域」という新しい保全制度の第1号に指定する方針を決め、この7月から都環境保全審議会計画部会で保全計画の策定に入った。この機会に横沢入の自然や歴史遺産について紹介したい。

横沢入は、中央の大きな谷戸と7つの支谷、湿地を取り囲む山地からなり、全体で約65ヘクタールの広さがある。上流部に人家がないため四季を通じて清冽な湧水が湿地を潤し、里山独特の貴重な動植物を育てている。もっともよく知られているのは、ゲンジボタルとヘイケボタルの両種が自然発生することだろう。6月下旬から7月はじめのシーズンには都内各地から多くの見学者がおとずれる。今のところここにしかない生物もいる。アミメカゲロウ目のヤマトセンブリがそれで、1994年に横沢入で発見され、新種として発表された。周囲の山々には南北朝から近世の伊奈石

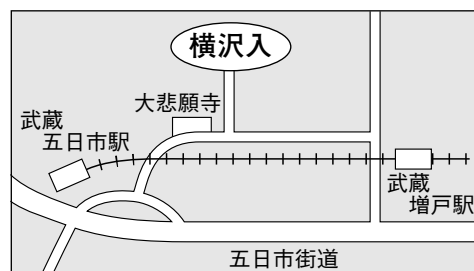
石切場遺跡群が展開する。また、炭焼窯跡や戦時中の横穴式地下壕、牽引車の車体を転用した通称「戦車橋」等もあり、歴史遺産も豊富で、生涯学習の場としてうってつけであろう。

一方、住宅開発計画があったために、この土地は15年間放置されてきた。この間の自然環境の遷移、特に湿地の乾燥化や森林の荒廃は激しく、里山環境の復元は容易ではない。現在、8つの市民団体で構成する「横沢入里山管理市民協議会」で協議しながら維持管理作業にあたっているが、より広範な市民参加が望まれる。草刈りや外来植物の駆除など、協議会として年に数度の市民参加の機会を設けているので、これらを通してより多くの方々にこの事業に参加していただければ幸いである。

（協議会ホームページ

<http://www.satoyama-club.jp/kyougikai/main.htm>

こうした中で、今もっとも頭の痛い問題は利用者による動植物の採取である。貴重な生き物を自宅の水槽の中で見たい気持ちは分からないではないが、ダメージの大きさ、回復の困難さに思いをいたす想像力を持つてほしい。里山は人との関わりの中で守られ育てられるが、逆に痛めつけるのも人の営みによってである。レジャーの場として、楽しみを享受する場としてのみ、自然と関わる発想を、この際、転換してほしいと切に望んでいる。



最寄図



「横沢入全景」



「川で遊ぶ親子」

私と多摩川

多摩丘陵の緑の保全運動



多摩丘陵を歩く会
清水 政孝

南武線川崎駅からいくつかの駅を過ぎて、武蔵を冠する駅に来てても里山はほとんど眺められなくなっています。多摩区に入り登戸駅に来ますと見事な多摩丘陵にお気づきになられる方も多いと思います。多摩丘陵では、幾多の開発をストップ、断念させたことで、今日、緑の里山が連なっているのです。

この丘陵を縦断する自然遊歩道は三つのコースで結ばれています。私たち「多摩丘陵を歩く会」は緑の保全運動を線から面に広げるために、これら三つのコースをベースとし、年一回ですが、多くの市民の皆さんに歩いて戴くことによって里山への共感を共有するようにしています。それが開発ストップなどにも、間接的ですが、力を発揮しているのです。

今年の「歩く会」は多摩遊歩道のメインである小沢城址を経て、開発計画が持ち上がっている峰続きの稲城南山までの、新緑の多摩丘陵を縦走しました。

南山は稲城市に位置し、昨年までオオタカの営巣が確認されています。「歩く会」はこの広大な緑地を有する里山を守りたい気持ちを一層強くしました。

多摩の里山を守った大きな役割について

1. 単なる開発反対から建設的な住民運動へ発展させ「遊歩道」建設を提起したこと。

自然遊歩道のルートに位置する里山の自然と史跡を緑地として市費で買収、地権者との保全協定を締結するなどして、緑と自然を保全した。

2. 「歩く会」の前身ともいえるべき「探歩する会」のネーミングが夢と冒険心をかきたて、開発に反対し、緑を守る住民運動にプラスに働き、参加者の増員が図

られたこと。

ムラサキシキブが群生しているところを「紫式部の小路」と名付け、ここに宅地造成計画の話が出たときに、「紫式部の小路」を守ろう」を合言葉に開発をストップできた。

3. ふるさとの史跡と緑を結んだ（小沢城址—菅・葉師堂—寺尾台八角堂—根岸古墳等）ことが市民の共感を広げ、行政への説得力になったこと。

参考までに、「自然遊歩道物語」（市村護郎著）には、里山がなぜみごとに残されたか、知恵と創造とロマンに溢れた住民運動があったことなどが記述されています。

規制緩和により川崎市内だけでも、この数年で22ヘクタールもの緑が減少するなど、危機的な状況にあります。多摩丘陵の自然を守る住民運動として、現在も沢山の団体が活動しています。

その中からいくつかをご紹介します。

「ドングリ山トラスト基金」

「向ヶ丘遊園の緑を守り市民の

いこいの場を求める会」

「マホロバの会」

月1回の遊歩道整備・草刈等の実施

今年は、特にホトトギスが、早朝・夕暮れに、この多摩丘陵を、我が縄張りと言わんばかりに、そら高く鳴きながら行き来しています。



東生田緑地（文献：「自然遊歩道物語」より抜粋）

財団からのお知らせ — 助成研究募集のご案内 —

多摩川およびその流域の環境浄化に関する 基礎研究、応用研究、環境改善計画のための助成研究募集

財団法人とうきゅう環境浄化財団（会長 清水 仁）は、1975年（昭和50年）より、多摩川およびその流域の環境浄化の促進や自然環境の保全などに必要な調査や試験研究を毎年公募してきています。その結果として、これ迄に452件の調査・試験研究に助成金を交付し、401件の調査・試験研究の成果が完成しています。

2006年（平成18年）4月からの助成についても、従来と同様、意欲的な調査や試験研究を募集しています。

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも、下記テーマに掲げた調査や試験研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

- ① 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
- ② 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
- ③ 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査および試験研究
- ④ 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査および試験研究

3. 応募方法

当財団所定の申請書に必要事項を記入、捺印の上、財団宛ご提出下さい。

「募集要項」「申請書」は200円切手同封の上、財団宛ご請求下さい。

なお、ホームページ上からもダウンロード出来ます。

<http://home.q07.itscom.net/tokyuenv>

4. 助成の決定

2006年3月に開催予定の当財団選考委員会にて選考のうえ、理事会に諮って最終的に決定します。

5. 応募締切日 2006年1月16日（月）

6. 応募にあたっての注意事項

①ご応募にあたっては、当財団の定める「調査・試験研究助成に関する調査・試験研究の選定基準、助成の方法、調査・試験研究の実施方法、助成金の支払い方法ならびに調査・試験研究者の個人情報の保護の方法に関する規程」を必ずお読み下さい。

②過年度に不採用となった調査や研究の再応募は受付けておりませんので、同一の調査・試験研究課題で再応募される場合は、前回のものと調査や試験研究の内容のちがいがよく判るよう工夫して、申請書をご作成下さい。

（次ページへ続く）



「小金井公園」

画家

笹本早苗

ささもと さなえ

昭和11年鳥取県生まれ ICU人文科学科卒業
尾崎悌之助(行動美術)、松田晃八(一水会)、
白石延夫(朔日会)らに師事、
54年朔日会同人、57年ルナ賞、58年船岡賞、
59年努力賞とホルベイン賞、
61年朔日会賞等受賞 平成7年没

ご協力：

財団法人 たましん地域文化財団

7. 助成研究の種別と条件 (前頁のつづき)

研究の区別	環境問題改善のための調査や試験研究で、専門性が高く、その分野の学識経験を必要とするもの。	環境問題改善のための調査や試験研究で、一般の市民が、特別な学識経験を必要とせず取り組めるもの。
(財団の過去の事例を参照)		
1件当たりの助成金総額の上限額	400万円	200万円
単年度の助成金上限額	200万円	110万円
研究期間	最長2ヶ年	最長2ヶ年
助成対象費目	(1) 器具備品費 原則対象外。ただし所属機関・個人所有もなく、調査や試験研究に必要な不可欠な物品で選考委員会で認められた場合に限る。 (2) 消耗品費 調査や試験研究に用いる各種材料、部品、薬品等。 (3) 旅費 調査や試験研究のための交通費、宿泊費等。 (4) 謝金 調査や試験研究のために臨時に雇った人の謝金等。 (5) その他 器機・設備などの借料、通信費、その他。	
<p>尚、学術研究へのご応募は、①研究計画の全てが助成金によるものではないこと、②旅費、謝金は、それぞれ助成金要望額の30%程度を上限の目安とすること、の2点に特にご留意下さい。上限の目安を大幅に超えてご応募される場合は、その理由を詳細に記した説明書を添付し、申請書と併せて選考委員会での審査に附して下さい。</p>		

- 発行日 平成17年9月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141
ホームページ <http://home.q07.itscom.net/tokyuenv>

